



TITLE:

ヴィジョンとしての宇宙論ーチャールズ・パースと「スフィンクスの謎」 (2) ー

AUTHOR(S):

伊藤, 邦武

CITATION:

伊藤, 邦武. ヴィジョンとしての宇宙論ーチャールズ・パースと「スフィンクスの謎」 (2) ー. 京都大学文学部哲学研究室紀要 2005, 8: 185-225

ISSUE DATE:

2005-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/24241>

RIGHT:

ヴィジョンとしての宇宙論

ーチャールズ・パースと「スフィンクスの謎」(2)ー

伊藤 邦武

第二章 一、二、三…宇宙の「元素」

「新ピュタゴラス主義的 (cenopythagorean sen^uō-pi-thag-ō-rē'an,

a. Gr. *καλὸς*, recent, new, + E. Pythagorean)。 普遍的カテゴリーは数と結びついており、数によって呼ばれるべきだということを容認する点で、ピュタゴラス主義に類似する現代の思想の立場。新ピュタゴラス主義的現象学とは、第一性、第二性、第三性という三項のカテゴリーを認める、普遍的現象学である」¹。

『センチュリー百科事典』

「わたしが言う迷路の導きの糸とは、思考を図標的で数学的なものにし、一般性を幾何学の観点から扱い、図標にたいして実験を行う方法である」²。

『連続性の哲学』

1 ケンブリッジ・プラトニズムの影

エマソンやパースが生きた一九世紀には、「宇宙論」という主題が真剣な知的探求の課題となることはきわめてまれであった。その最大の理由はいうまでもなく、カントが『純

粹理性批判』において、「純粹理性のアンチノミー」という考えのもとで宇宙論的な思弁が必ずや矛盾にまきこまれることを証明して以来、宇宙論の議論は原理的に不可能なものとして、知的な探求の世界から閉め出されたからである。周知のように、カントは宇宙の空間や時間にかんして、それが無限であるか有限であるかを論じるような議論は、どちらの側に立っても容易に否定できるために根本的に不毛な議論であり、その対象となっている「宇宙全体」という理念そのものが内実のない「仮象」であるといったのだった。

さて、カントのこのような議論は近代哲学の主流を非常に深いところで決定し、その結果として、あらゆる種類の形而上学的な思弁は哲学史の正面からほぼ姿を消したのだった。しかし、もちろんカント以降のすべての思想家、哲学者がこの議論に全面的に従って、形而上学的議論の不可能性に納得したり、宇宙論的探求の無意味性という考えに賛同したわけではない。たとえば、ほんの一例だけを挙げると、カントの後のシェリングは、スピノザ的な一元論とロマン主義的な自然哲学を合体させるために、イタリア・ルネッサンスの思想家ジョルダノ・ブルーノの名前を借りて、『ブルーノ、または事物の神的原理と自然的原理について』のような宇宙論哲学を展開している。このテキストではブルーノ、ルチアン、アンセルモらの登場人物が、「哲学と詩の間にある類似の関係」や「真理のアイデアと美のアイデアの同一性」をめぐって会話を展開し、可視的宇宙の「一般的構脚」や、そこからの「特種なものの演繹」などの問題を論じている³。

シェリングはヘルダーリンらとともに、カントやヘルダーの批判的哲学によって哲学が純化された後に、かえって新しい観念論の復興が、ある種のルネッサンスとして生じるであろうと考えたわけであり、そのために彼らは、スピノザ的な一元論と新プラトン主義流の世界靈魂の思想を結びつけるというような、自由な思想上の冒険を試みたのであった。これは、キリスト教の神学からすると、それまで異端とされ正面から論じることのできなかった汎神論が、正統的な神概念の哲学的消去によって、むしろ前面に登場する機会を得た時代であるというふうにも理解できるであろう。

そして、彼らと同様に、こうしたドイツ観念論とは別の系譜に属する、エマソンらの一九世紀アメリカ・ルネッサンスの思想家たちもまた、古代の神話や『聖書』の問題意識と並んで、イタリア・ルネッサンスの思想を継承したドイツ観念論とはもうひとつ別の思想のうちに、宇宙論的思弁の理論的モデルを見いだそうとしたのであった。エマソンやパースにとっての宇宙論的議論の理論的モデルとなったもの—それは、イタリア・

ルネッサンスのネオプラトニズムを一七世紀のイギリスに移植した、ケンブリッジ・プラトニストたちの思想であり、そのなかでもとりわけ、レイフ・カドワースの『宇宙の真なる知的体系 (The True Intellectual System of the Universe)』の理論が、彼らの共通の議論の出発点となったのである。

「ケンブリッジ・プラトン主義者」ないし「ケンブリッジ・プラトン学派」という言葉は、あまり聞き慣れない名前であり、どちらかといえば不協和音的な響きをもった名前とさえいえるが、思想史のうえでは一七世紀中葉のイギリスのケンブリッジ大学において活躍した、特異な哲学者・神学者のグループを指している。その創始者は一般にベンジャミン・ウィチカット (1609-83) であるといわれている。ウィチカットのもとに結集した主たる哲学者は、ヘンリー・モア (1614-87)、レイフ・カドワース (1617-88)、ジョン・スミス (1619-52) らであり、彼らはケンブリッジ大学のエマニュエル・カレッジを拠点として、当時ケンブリッジを始めとするイギリスの知的階級において支配的であったカルヴィン主義に反対するために、当初はエラスムス流の人文主義やオランダのアルミニウスの思想に依拠していたが、次第にイタリア・ルネッサンスのフィチーノやピコ・デラ・ミランダを経由した新プラトン主義へと傾斜していき、この思想によって、一方では宗教思想としての新風を巻き起こすとともに、他方では、当時台頭しつつあったホッブズの唯物論や、デカルトの二元論的機械論に抵抗しようという、二面作戦的な運動を展開したのである。

これらのケンブリッジの思想家は、われわれが今日手にする哲学史の多くではほとんど目にするのではなく、かろうじてモアの名前だけが、デカルトとの屈折した関係―彼は当初は熱烈なデカルト支持者であったが、途中からその批判者に転じた―で言及されるだけである。その意味で、現代のわれわれにとってのケンブリッジ・プラトニストの代表は、モアであるといってもよい。たしかにモアはカドワースの三歳年長であり、ふたりの間には緊密な影響関係があったともいわれる。しかし、当時のイギリス思想界においてこのグループの中心的思想家と目されたのは、カドワースのほうであり、そのことはエマソンやパースのような一九世紀の思想家たちにとっても変わらなかった。さらに、以下に少しだけ見るように、カドワースの思想はその後のロックやライプニッツの思想の交流に介在するという形で、正統な哲学史の流れにおいてもけっして無視できない役割を果たしてきたのである。

さて、このプラトニズムはホッブズの唯物論とロックの経験論の間に栄えた思想であ

る。そして、ホッブズの『リヴァイアサン』が1651年の出版、ロックの『人間知性論』の出版が1689年であることを考えると、その盛名の期間は非常に短かったといふべきであろう。当時はイギリス史でいえば、フランスのルイ十四世の絶対王政に対抗すべく、ジェームズ二世がカトリックの復活を試みて失敗、結果として名誉革命を経て立憲君主制へと移行するという、イギリス独自の政治形態が確立していく時代である。いわばイギリスの近代が形成されていく激動の時代といってもよい。そしてこの政治的激動にたいして、思想上のイギリス流プラトン・ルネッサンスの力はいささかも微弱なものにとどまったといふべきであろう。今日この特殊な哲学・宗教思想にかんする研究書は、世界的に見ても数えるほどしかなく、わが国においては、カッシーラーの『英国のプラトン・ルネッサンス』（ドイツ語原著は1932年）がほぼ唯一の参考書であるといつてもよい状況である⁴。そして、この書物は数あるカッシーラーの著作のなかでも小著の部類に属し、ほとんど『シンボル形式の哲学』の完成後の余儀とも見えるような、地味な作品である。とはいえ、この小著が「ヴァールブルク文庫叢書」の一冊として出版されたこと、そしてカッシーラーとこの希有な文庫との遭遇が『シンボル形式の哲学』のあの豊かな世界を生み出していたことを顧みるならば、その副産物ともいえるこの書物の価値もおのずから異なって見えることであろう。とくに、作者のナチス・ドイツからの亡命を控えた時期の作品であることを念頭において読む者は、この書物が鋭い輝きをうちに秘めた小さな宝石のような作品であることに、改めて感銘をうけずにはいないことであろう。

そのカッシーラーはこの書の冒頭で、この学派の「プラトン主義」を次のように特徴づけている。

「慣例にしたがってケンブリッジ学派の思想を「英国プラトン派」と呼んでも、客観的にはさしさわりのない。しかし、哲学上の大部分の分派名や学派名と同様に、この名称は便宜的で不完全な真実を表すものにすぎない。というのも、彼らがどれほど頻繁にプラトンを引用しようと、また哲学における守護聖人としてどれほど崇拜しようと、彼らの仕事は決してプラトン思想の直線的継承あるいはたんなる再受容ではないからである。・・・彼らの著作においては、プラトンの学説は屈折媒体を通して変形されているように見えることが多々ある。ケンブリッジ学派の思想家にとって信頼に値し模範とすべきものに思われたのは、とりわけマルシリオ・フィチーノとフィレンツェ・アカデミア

によって描かれた例のプラトン思想の像であった。・・・フィチーノとピコ・デラ・ミランドラ同様、カドワースとモアにとっても、プラトンは他のモーセ、ゾロアスター、ソクラテス、キリスト、ヘルメス・トリスメギストス、プロティノスなどが連なる神の啓示の黄金の鎖における一つにすぎなかった。彼らにとって、プラトンは真の哲学と真のキリスト教がいかなる点でも対立するものではないことを示す証人、生きた証拠であった。彼はあの「敬虔なる哲学」(pia philosophia)の祖先・守護者であって、それはキリスト教の啓示以前にすでに存在し、幾世紀にもわたってその効力と生命力を実証してきたものであった」⁵。

カドワースらにとって、「プラトンは真の哲学と真のキリスト教がいかなる点でも、対立するものではないことを示す証人であった」—カッシーラーは、彼らがこの点で、プラトンを特に神聖視していたことを認めている。しかし、ここではとりわけプラトンが同時に、「他のモーセ、ゾロアスター、ソクラテス、キリスト、ヘルメス・トリスメギストス、プロティノスなどが連なる神の啓示の黄金の鎖における一つにすぎなかった」、といわれている点に注意しよう。すでに見てきたように、エマソンにとってはスフィンクスの謎は、「ピュタゴラス、プラトン、バイコン、ライプニッツ、スウェーデンボルグら」によって答えられようとしたはずのものであった。カドワースにとってプラトンがゾロアスターやピュタゴラスらと同列に置かれるべき思想家であったこと—そのことが、エマソンの考えるスフィンクスと対峙する哲学者のうちに、プラトンが数えられる理由でもあったのである。

ルネッサンスのフィチーノにとっても、ケンブリッジのプラトン主義者にとっても、そしてさらには「トランスセンデンタリズム」の立場に立つわれわれのエマソンらの思想家にとっても、「敬虔な哲学」はさまざまな思想の折衷によって可能になる精妙な奥義と考えられたが、カドワースの『真の知的体系』はまさしくこの種の折衷主義の典型ともいうべき宇宙論の集大成である。彼はこのテキストにおいて、「形成的自然 (Plastic Nature)」という彼独自の自然哲学的原理の思想を展開するのであるが、一方では、この思想が古今のあらゆる自然哲学のうちに萌芽的なかたちで存在したことを、プラトン、アリストテレスはもとより、ヘラクレイトス、ゼノン、デモクリトスら、古代ギリシアの数多くの哲学者たちの教説のなかに検証し、ひいてはパラケルズスらの近世の哲学をも自らの思想の先駆者として列挙している。パースやエマソンにとってこのテキストが

宇宙論的探求のひとつのモデルを提供した理由は、この書物に盛られたカドワースの「形成的自然」の原理が、それ自体として重要な哲学的難問を突きつけているからであるが、同時にその百科全書的な古今の理論の網羅によって、哲学の歴史におけるあらゆる宇宙論的思弁を展望してみせた、恰好の参考書ともなっているからである。

（この書物は1678年の初版において、すでにフォリオ版900頁を数えたが、そのラテン語版が1733年に出版されたとき、訳者のモスハイムが本文中に引用されている古今のテキストの典拠を示すとともに、多くの解説を註として加えたために、元の大きさは倍加された。このモスハイム訳のラテン語版をもう一度英語に訳し直したものが1845年に出版され、一九世紀の英米の思想家たちはこの大部な三巻本に接したのである⁶⁾。

エマソンはカドワースに先立って、まずトマス・テイラーによるプラトン全集全五巻（1802年刊）に心酔し、33年にイギリス旅行を行った際には、ワーズワースやコールリッジ、カーライルたちイギリスの文人たち相手にプラトン論議を交わすことを主たる目的としたのであるが、その折にカドワースを知って以来、今度はこの思想こそが自分の哲学をもっとも直接に表現したものであると考えるようになった。彼の『自然論』はカドワースへの傾倒のもとで書かれたものである（『宇宙の真なる知的体系』の「形成的自然」や「世界靈魂」の思想は、そっくり『自然論』に活かされているが、それ以外にも、先に見た「松の木」に登場する「半獣神（パーン）」なども、カドワースのテキストを下敷きにしている）。そしてその傾倒がずっと変わらなかったことは、10年後のモスハイムの新版に接した際に記した、次のような日記の一節にも現れている。「カドワースのこの著作は、豊富な引用から、並外れた章句や古代哲学の光り輝く峰々まで、まさに素晴らしい啓示をはらんでいる」⁷⁾。

他方、パースはその十年ほど後の大学時代に最初にこの書に触れている。彼の哲学上の模範は、大学時代以来一貫してライプニッツとカントによって与えられているが、近代哲学ではホッブズとカドワースとがその次に位置しているといってもよい（彼はスコラ哲学にも非常に通じていたが、古代のギリシア哲学に触れるようになったのは、むしろ後年になってからである）。彼はしばしば、一七世紀の哲学が「ホッブズ、カドワース、マールブランシュ、スピノザ、ロック、ライプニッツ、ニュートン」を生んだと述べており、とくに、「自然法則」をめぐるオッカム以来の唯名論的解釈の興隆（ホッブズ、ガッサンディ、パークリー、ヒューム）にたいする強力な批判者としてのカドワースの意

義を評価し、自分の実在論的な自然法則論が彼の立場に与するものであることを強調している⁸。

彼らが触れているカドワースの思想とは、ホッブズに対抗するために彼が提出した「形成的自然」の理論であるが、それは簡単にいうと、自然のなかに見いだされる物質的な機械論的因果性の底には、形成的自然という精神的な原理が働いており、この原理によって機械的な自然現象のみならず、生命や精神の働きも説明されるようになる、というものであった。デカルトやホッブズの機械論的自然観では、すべての運動変化が粒子的な事物どうしの近接因に還元されるために、複雑なものの存在を単純なものの存在から、有機的な存在を無機的な存在から、自由な現象を必然的現象から発生したものとして説明する他はないが、このことは実際にはまったく説明不可能であり、したがってこれらの現象は理解不可能なものにとどまることになった。これにたいして、新プラトン主義に立つカドワースらにとっては、自然現象の説明は原初的なものからの「流出」によって説明されるべきものなのであり、この説明様式にのっとり、神という一切の事物の創造者にして源泉であるものから流出する「形成的自然」という原理のもとで、個別的な存在領域におけるさまざまな変化の形式が構成されたとするのである。

「自然にははしごないし等級 (ladder or scale) が存在し、完全性の度合いに応じて存在者の間に幾重にも積み重ねがあることは、疑いがない。死んだ、意識のない、考えることのない物質のうえには、生命、感覚、思考があつて、感覚その他のうえには理性と知性がある。・・・したがって、実在には等級またははしごのような段階があることは明らかであり、ものごとの秩序は疑いの余地なく、下降する仕方、より高く完全なものからより低いものへと下っていくのである。・・・このはしごのステップないし度合いは、どちらの方向にかんしても無限ということはない。すなわち、一番低い端、底辺、足下には無知で意識もない、一切の生命と知性を欠いた物質があり、はしごの一番うへ、先端、頂点には、それ自身を、そして森羅万象の一切の可能性を、包み理解している完全かつ全能な存在がある。・・・精神はすべてのもののなかで最古のものであり、諸元素と物質的な世界全体とに先行している」(『宇宙の真なる知的体系』 1巻5章4節)⁹。

「自然のさまざまな作業が神の法と命令 (divine law and command) とによって執行されているというのは、そのとおりであるが、しかしそれがあたかも言葉で書かれた法や外的な命令などの力にのみ頼ってすべて実行されているかのように、通俗的な意味

で理解されてはならない。というのも、生命のないものがそのような法によって命令されたり支配されたりすることはないからである。それゆえ、神の意志と快の他に、すべての結果を生み出すための、別の何らかの直接的な作用者や実施者 (**immediate agent and executioner**) が与えられているはずである。・・・したがって、自然の事物を統治している神の法と命令とは、すべての結果を生み出すための何らかのエネルギー的、作動的かつ作用的な原因 (**energetic, effectual and operative cause**) によって、実際の遂行をまかされていると考えられるべきである。・・・それゆえ、あらゆる事物は偶然に、導き手のない物質の機械的作用によって生み出されるのでもないし、また、神みずから直接的かつ奇蹟的にすべての事を行うと考えることも合理的ではないので、神のもとに、その下位の従属する道具としての形成的自然が存在して、それが神の摂理のあの部分、すなわち物質の規則的かつ秩序だった運動というものを、こつこつと実行しているのだと結論できると思われるのである」(1巻3章37節)¹⁰。

この引用からも明らかなように、カドワースの自然観は究極的には精神の原理を基礎におく、唯心的なものであるが、実際の自然の過程を導いているのは、「形成的自然」という「エネルギー的にして作動的な原因」であるとされる。「形成的な (**plastic**)」自然とは、文字どおりプラスチックな本性、可塑的な本性であり、事物を生み出し、形を作り、形を変えていく原因である。この原因は物質的世界においては作動原因的に (**efficiently**) はたらくのであるから、それ自身は心的ないし意識的な働きではない。それはむしろ、個々の機械論的作用の根本的な原理となる、物質の究極的な力に他ならず、無意識的なものである。しかし、この自然全体が生命や知性も生み出しているのであるから、その根底にあるこの形成的自然をも全体として一個の存在者として見るかぎり、「世界靈魂」にも等しい精神性をもっている。つまり、形成的自然は神の摂理の道具としては物質的なものであるにもかかわらず、そのはたらきの本質は精神的なものなのである。

さて、カドワースの形成的自然の概念はスピノザ的な一元論の実体とも異なった、独自なはたらきをするとされる興味ぶかい概念であるが、明らかにこのままでは曖昧な面を残した考えであるといわざるをえないであろう。それは物質にも精神にも共通の作用力をもつというが、その作用の厳密な形式はいかなるものなのか。形成的自然が神の「道具」といわれるとき、それはたとえば、ニュートンが空間と時間とを神の「感覚器官の

ようなもの」といったことと、どのように異なるのか。カドワース自身はこの概念の価値を、古代ギリシアの多くの哲学思想との類似性の強調によって証明しようとしているが、むしろ重要なのは、この概念の曖昧さを取り除き、その整合性、生産性を実際の自然現象のなかで確かめることであろう。それゆえ、エマソンやパースの宇宙論的企ては、このカドワースの「形成的自然」の考えにたいして、それぞれ別の角度からより具体的な説明を用意しようとしたものであったといってもよい。それは、エマソンであれば、精神と物質との間の象徴的かつ鏡像的關係や、自然法則の上位に位置する「より高い法則」というアイデアであり、パースであれば、以下で見るように、第一性としての偶然や自発性と第三性としての習慣や法則性の、物心における異なった組み合わせに由来する、宇宙の複雑な進化の論理として追求されようとしたものである。本論で解きほぐそうとする、パースの宇宙論の一面とは、まさしくこの「形成的自然」の働きを理論的に厳密化する、という問題であったともいえるのである。

ところで、カッシーラーはこのケンブリッジ・プラトニズムの自然哲学にかんして、特に一節をさいて、この思想にたいする同時代のライプニッツの批評を参照することが重要であると述べている。すなわち、ケンブリッジ・プラトン主義者たちの宗教観にもっとも近似した一七世紀の哲学者はライプニッツであり、彼自身がこの学派の立場と自分の形而上学的体系との間に多くの接点があることを、はっきりと自覚していた。ライプニッツはカドワースの主著に熱烈な称賛をこめて言及さえしていた。しかしそれにもかかわらず、彼は「形成的自然」の説に従わなかったが、それは理論的内容に反対したからではなく、その分析の「方法」に反対したからである。カッシーラーはこのように述べて、ライプニッツによるカドワースらへの批判が、哲学的に重要な意味をもっていることを力説している。

さて、ライプニッツの形而上学のうちに近代の合理主義哲学の最高の到達点を見るカッシーラーにとっては、このドイツの哲学者とイギリスのプラトン主義者との対比が特別な意味をもつであろうことは、容易に想像されることである。しかし、この点は実は、われわれの関心にとってもまさに見のがせない点である。というのも、ライプニッツによるケンブリッジ・プラトニストへの共感と批判とは、本質的に、その二世紀後のアメリカ、マサチューセッツ州のもうひとつのケンブリッジにおける、パースとエマソンとの共鳴と距離感というテーマに通底して響いているからである。

(ここで余談ながら、カッシーラーは触れていないカドワースの哲学史上の間接的な

役割についても、一言付け加えておくと、このカドワースの宇宙論が、ロックとライプニッツの哲学の邂逅のきっかけをなしていた、という事実にも注意しなければならない。ライプニッツがロックの『人間知性論』の経験論的認識論に反対して、『人間知性新論』という合理主義的認識論を著したことは哲学史の常識であるが、ライプニッツにこうしたロック批判のきっかけを提供したのは、カドワースの娘のマシャム夫人との文通であった。ロックはマシャム夫人と若い頃から知り合いであり、後年はその館に子息の家庭教師のようなかたちで住み込んでいた。夫人自身が一個の独立した哲学者でもあったために、二人は互いのよき理解者であったのである。マシャム夫人はベールの『歴史的批評的辞典』を通じて、ライプニッツの予定調和の思想を知り、そこに父カドワースの哲学との近親性を見てとって、批評を乞うた。そしてライプニッツのほうはこの文通をきっかけとして、カドワース批判からロック哲学の本格的批判へと移っていったのである。ライプニッツはこのとき、マシャム夫人自身が一個の哲学者であることを見抜くことはできなかったが、今日では夫人はひとりの宗教・道徳哲学者として、女性哲学者の歴史のなかに確固たる地位を占めるにいたっている¹¹⁾。

カッシーラーはライプニッツによるカドワース批判を次のように説明している。

「ライプニッツがケンブリッジ学派の思想家たちに意識的に反対してこの方法〔無限小解析にもとづく自然の数学的理解〕を打ちだしたのは、彼自身がこれらの思想家たちと異なるもう一つのプラトン主義解釈をとったからではなかった。ケンブリッジの哲学者たちは形而上学と神学からプラトン思想に接近し、つねにこの観点から考察する。ところがライプニッツは論理学者かつ数学者としてプラトン思想を新たな光のもとでつかみとる。彼はフィレンツェ・アカデミアが描いた「プラトン主義」の像から精神的に自由となって、プラトンを自分自身の目でとらえ直すことのできたヨーロッパにおける最初の思想家であった。だからプラトン本来の思想を後世の追加物とみさかいなく混ぜ合わせ、プラトンの要素と新プラトンの要素を雑多によせあつめた例の混合主義にたいして、彼ははっきりと抗議した・・・。

われわれはプロティノスやマルシリオ・フィチーノにもとづいてプラトンの教説を判断してはいけない。というのは、彼らはいつも奇跡的なものや神秘的なものをとらえようと汲々としていたので、彼の基本的教説を台無しにしてしまったからだ。・・・

このような判断と批判的な弁別は、ライプニッツのようにプラトンの論理学と弁証法

の根本問題を自分で再発見した思想家にして初めて可能なことであった。ライプニッツもまたケンブリッジの哲学者たちのように形而上学においては唯心論者であるが、しかし彼らと異なるのはその唯心論を純然たる宗教的前提の上にたてるのではなく、論理学的・数学的観念論の基盤の上に築こうとする点である。彼がプラトンに援助を求めるのもこのためである」¹²。

ライプニッツはカドワースのなかに真のプラトンとは異質のものを見いだした。彼は何よりも、カドワースが—そしてフィーノらが—プラトンにおける数学的思考の重要性を見誤っていた点で、決定的に限界をもっていると考えた—。ライプニッツによるこの批判は、パースにとってのエマソンらの自然観にかんする批判的視点とそっくり重なってくる。なぜなら、カッシーラーがいうように、ライプニッツがプラトンを自分自身の目でとらえ直すことのできたヨーロッパで最初の思想家であったとすれば、パースはまったく同じように、「敬虔なる哲学」における数学的、論理学的思考の重要性を見抜くことのできた、アメリカにおける最初の思想家であったからである。つまり、エマソンがカドワースに自分と同一の思想を見いだした思想家であるとすれば、パースはそれに賛同しつつ、より厳密な方法の価値を見抜いていたライプニッツの再来であるということになる（そして、事実、彼は自分にもっとも似ている歴史上の哲学者はライプニッツだと、随所で書いている）。

パースはあらゆる形而上学的思弁の底に、カントとは異なった新しい論理学が考えられなければならない、それは数学的思考法にしたがって追求されなければならない、と考えた。それはしかし、どのような論理学であったのか。そして、それが彼の「一、二、三」というワルツのようなカテゴリーをいかにして生み出したのか。われわれはこのあたりで、これまでの何重かに屈曲した哲学的前史の瞥見を終えて、パースにおけるこの点—数学的・論理学的思考の重視—を確かめるといふかたちで、そろそろと二世紀後のパースの思想世界のほうに目を移すことにしたいと思う。

2 パースのキャリア

パースは1887年から88年にかけて、『謎への推量』を書き綴った。このテキスト

は30-40頁ほどのものであるが、これがパースの本格的な形而上学、思弁的体系化の試みの第一歩であった。彼はこの本の執筆に数カ月を費やして、「わたしは状況が許すならば本書をすぐにでも完成させるつもりであり、それが完成した暁には、新時代の到来を告げるもののひとつであるような、傑作となるはずである」と述べていた。そして、この本の扉にはスフィンクスの挿画が飾られるべきであると指示していた。

この本は残念ながら結局当初の計画の半分ぐらいしか完成せず、未完の原稿が残ったままに終わった。しかし、パースはその二年程あとの1891年の初頭から二年ちかくにわたって、この『謎への解答』の中身をさらに掘り下げた論文シリーズを、雑誌の『モニスト』に発表することができた。何度も述べたように、われわれが本書でパースの宇宙論として論じようとしているのは、これら『謎への解答』と『モニスト』の連続論文シリーズ、およびいくつかの関連論文なのであるが、その理論の方向性や具体的な内容を見るまえに、まず、パースの哲学にたいする基本的な姿勢、そして、これらのテキストを書いた時点での彼のキャリアや思想的背景について、とりあえず簡単に押さえておくことにしよう。

われわれはここで、そのための取りかかりとして、『モニスト』の第三論文「精神の法則」の冒頭に置かれた、ひとつの興味ぶかい一節を引用することから始めたい。

『モニスト』の論文シリーズについては、これから何度か言及することがあるので、あらかじめその表題を並べておくと、次のとおりである。

- (一) 理論の建築物
- (二) 必然論の批判
- (三) 精神の法則
- (四) 鏡のように脆い人間の本性
- (五) 進化的な愛
- (六) 必然論者への返答

このうち、第六論文は第二論文「必然論の批判」にたいして、『モニスト』の編集者のポール・ケイラスが二篇の批判論文を書いた、その批判にたいするパースからの返答である。したがって、このシリーズは正確には、五篇の論文と一篇の付属論文とからなっていることになる（以下、第六論文省いて、このシリーズは五篇の論文シリーズとして扱う）。

パースは第一論文で、哲学の体系的構築ということについての彼の考えを述べている。

これは彼の方法論ということになるが、思考と存在に共通する普遍のカテゴリーということが論じられるのは、この第一論文においてである。そして、第二論文では、パースの時代以前までの西洋近代哲学に共通する考えとして、「必然論」というものがあることを指摘し、新しい時代の哲学を標榜する者はこのドグマを否定して、「偶然主義」の立場に立つ必要がある、ということが説かれる。具体的な宇宙論あるいは形而上学が論じられるのは、これらの後の、第三篇からであるが、この第三論文「精神の法則」の冒頭で、パースは彼の思弁的哲学とそれ以前のエマソンに代表されるような観念論との関係について、簡単に説明している。以下に見るように、その説明は一見したところ一種の自嘲的なトーンを帯びていて、思弁的な哲学にたいする彼の複雑なスタンスを示しているようにも見える。われわれはしかし、その自嘲的な調子の底に、彼自身のなみなみならぬ意気込み、あるいは覚悟のようなものを読むことができるのである。

(パースは実は、第二論文とこの第三論文執筆の時期の間に、きわめて特異な神秘的体験をしたとされている。彼の文体に強いアイロニーの調子が含まれているのは、あるいはこの体験への戸惑いや恥じらいのゆえかもしれない。しかし、この体験については後に別のところで触れることにして、とりあえず彼の哲学上のスタンスと、それまでのキャリアを知るために、この一節をまず最初に読んでみることにしよう)。

「わたしは『モニスト』の第一論文で、哲学体系の土台を形成するのはどのような観念でなければならないかを示そうと努めたが、そこでは特に、絶対的偶然という観念を強調しておいた。そして第二論文では、その偶然を強調する思考方法を支持するような議論を、さらに展開した。ここではこの思考方法を、「偶然主義 (Tychism、ギリシア語の「偶然」 τυχη から)」と命名しておくのが便利であろう。・・・さて、わたしがこれらの論文でまず明らかにしたのは、偶然主義が、進化論的宇宙論を生み出すであろうということであったが、この宇宙論は、自然と精神において見られるすべての規則性を、成長の産物と見なすものである。また、この偶然主義は、シェリング風の観念論を生み出すということも明らかにされたが、この観念論は、物質をもって特殊化した精神、生命力を失った精神にすぎないと見なす立場であった。ここで、この観念論との関係で、著者の精神的伝記を知りたいと思う人のために、わたしの経歴についてひとこと付け加えておけば、次のようにいえるだろう。わたしはエマソンやヘッジやその友人たちが、シェリングからつかみ取った思想を周囲にまき散らそうとしていた、ちょうどその時代

に、コンコードの近く一つまりケンブリッジのことだが一で生まれ育ったのである。シェリングはその思想をプロティノスやベームから、あるいは、東洋の途方もない神秘思想に感染した誰とも知れないような人々から、つかみ取ったのであるが。とはいえ、当時のケンブリッジの雰囲気は、コンコードの超越主義の蔓延を防ぐために、大量の消毒剤が散布されていた状態にあった。そこでわたしが意識している限りでは、自分がそのウィルスに感染した記憶はまったくないのである。しかし、それにもかかわらず、何らかの培養されたバクテリア、良性のタイプの病気が知らず知らずのうちにわたしの精神に植え付けられていて、長い潜伏期間をへた今になって、数学的な諸概念と物理的研究の訓練によって修正された形で、表面に現れてきたということはあることなのである」¹³。

「著者の精神的伝記を知りたいと思う人のために、わたしの経歴についてひとこと付け加えておけば、次のようにいえるだろう」—この言葉とともに語られたこのパッセージには、短い文章のなかにいろいろのことが述べられているが、ここではとりあえずさしあたって、ふたつの点に注目しておくべきだろう。ひとつはエマソンの根拠地であるコンコードとパースの育ったケンブリッジとの関係についてであり、もうひとつはエマソンの「修正版」としての彼の思想の特徴ということについて、である。

まず、コンコードとケンブリッジということについて見ておこう。パースは右の文章で何よりも、エマソンらのトランセンデタリズムや、その思想的雰囲気のなかで醸成された観念論—物質が生命力を失った精神すぎないと見る考え方—、あるいはそれに混在する東洋の神秘主義などを、「病気、ウィルス、バクテリア」として語っており、これにたいして、当時のケンブリッジにはその病気を避けるための大量の消毒剤がまかされていたという。これはどういうことなのだろうか—。エマソンの住居のあるコンコードは、パースが生まれたハーヴァード大学のあるケンブリッジからは、北西の方角に二〇キロほど離れた郊外になるが、途中に大きな町があるわけではなく、ふたつの町はほとんど地続きといってもよいような同じ世界に属していた。(ケンブリッジはボストンに隣接する大学町であり、この市名はもちろん、独立前のマサチューセッツ州で一七世紀中葉にハーヴァード大学が神学校として創立された際に、カドワースらが活躍することになるイギリスの大学町ケンブリッジに倣って命名されたのである)。

パースの父はハーヴァードのもっとも有力な数学教授であったが、大学近くの同じ通

りに家を構えるスウェーデンボルグ主義の宗教家ヘンリー・ジェイムズ・シニアとは深い親交があった。そしてこの宗教家はエマソンを心から尊敬していて、家族つきあいをしていたのであるから、結果としてパース家においてもエマソンのグループとの親交は十分に密なものがあつた。(そもそもエマソンとヘンリー・ジェイムズ・シニアとの交流は、1842年長子ウィリアムの誕生とほぼ重なるようにして始まっている。1855年ころに土曜クラブというのがボストンに作られて、エマソンを中心にロングフェローやホーソンなどの著名な知識人が集まりをもっていた際には、パースの父もその会に参加しており、ケンブリッジに定着する以前のジェイムズ・シニアも、ニューヨークからしばしば出向いていた¹⁴⁾。

しかし、パースやヘンリーの長男ウィリアムがハーヴァードに入学するころには、創設以来200年を経た大学は、新たに自然科学を中心にした大学へと脱皮することに専心しており、パースも、その生涯の友となるウィリアム・ジェイムズも、学部生としてはまず化学や医学を専攻することを選んだのである。彼らはともに、新しく設置されたばかりのローレンス科学学校に所属したり、スイス人の博物学者ルイス・アガシの指導を受けたりした。彼らが大学生として過ごした1850年代の後半は、ダーウィンの『種の起源』の出版によって思想の世界に激震の走った時期であつた。それはまさしく神学的思考と科学的思考の決定的な対決の時代であつた。パースの世代はこの時代の子として、科学のほうを選んだのであり、それはアメリカ最古の大学であるハーヴァード大学そのものにとっても、同じ選択を迫られる時代だったのである(ローレンス科学学校の運営にしろ、アガシの招聘にしろ、ハーヴァードの自然科学強化の指揮に当たったのは、他ならぬパースの父であつた)。

ハーヴァード大学のケンブリッジはしかし、たしかに宗教よりも科学のほうを向いていたとしても、神学校としての前身を完全に忘れていたわけではない。パースやジェイムズは自然科学を専攻すると同時に、ダーウィン流の人間観から出発する哲学の再構築へと進むのであるが、彼らが科学と同時に席を置いた哲学科は、1905年にそれまでの古典学との同居から新しい建物に移り、心理学、社会学とともに「哲学部門」として独立した。その建物は「エマソン・ホール」と名づけられて、エマソンの大きな銅像を玄関ホールのシンボルとして飾っており、それは今日まで続いている。パースやジェイムズの活躍によってアメリカ哲学の黄金時代を画し、現在にいたるまでなおその地位が揺るがないハーヴァードの哲学科にとって、その精神的象徴の座はどこまでいっても、

同じ地域に属するエマソンによって担われているのである。

したがって、たしかにパースの世代はエマソン流の宗教哲学とは別の世界に属することにはなったが、しかし彼らの出自からいえば、それを「ウィルスやバクテリア」となぞらえるほどに、強い表現を使う必要があったかどうかは疑問である。少なくとも、彼の時代のアメリカの哲学の読者に、観念論にたいする強い疑問符を示さなければ、始めから耳を傾けてもらえない状況であったとは思われない。それにもかかわらず、1890年代のパースがエマソン流の観念論について振り返ったとき、それを「病氣」のレトリックのもとで論じているのは何故なのか。その理由として考えられるひとつの推測としては、この論文が掲載されている雑誌『モニスト』の編集者や読者にたいして、パースがとったポーズということもあるだろう。

この雑誌は、イリノイ州ラサールで成功を収めたドイツ人の化学者、実業家エデュアルト・ヘゲラーが創設した出版社、「オープンコート」から発行されていた。同じくドイツ出身のケイラスがヘゲラーに招かれてその編集にあたったのであるが、『モニスト』という名前はケイラスの思想的立場を表している。モニストとは一元論者を意味するが、ケイラスはこの言葉で、唯物論や唯心論などの具体的な一元論ではなく、ただ世界全体の一切の事物がひとつの法則に依存していて、その法則の源こそが神である、という思想を意味していた。それゆえ、この雑誌の根本的な基調はむしろ旧来の形而上学に通じるものであり、決して革新的な方向を目指したものではなかった。しかし、ケイラスは自分の思想とは対立するような思想—とくに実証主義の流れをくむ科学の哲学—の紹介に非常に熱心であり、しかも国際的な視野から雑誌を編集しようとしていたために、結果としてマッハ、ヒルベルト、ラッセル、デューイなどの重要な思想家を紹介し、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、もっとも新しい哲学の国際的な論壇を形成することになった。(わが国の鈴木大拙がアメリカに渡ったとき、最初についた職はケイラスの助手であった。また、『モニスト』は1940年ころに一旦廃刊になるが、1960年代後半に再刊され、現在でももっとも有力な国際的哲学誌のステータスを保っている¹⁵⁾。

パースがこの雑誌に寄稿することになった頃は、まだ『モニスト』の創刊から間がない時期であり、その国際的で進取にとんだ性格が全面的に確立されるにはいたっていなかったが、それでもマッハの論文などはすでに掲載されていたので、国際的な実証主義の興隆は十分に意識していたはずであり、そのことがローカルなアメリカ思想にたいする必要以上の距離感の表現となったのであろう。これはいわば、彼自身がヨーロッパの

実証主義的科学哲学に十分に通じていることをアピールしようとした、パースのレトリックであると考えられる。

しかしながら、パースにとっては、雑誌の読者に向けたポーズ以上にエマソンらの思想にたいする距離を示す必要が、やはりあったのであろう。それはいうまでもなく、その哲学のスタイル、方法にかんする相違である。そしてそのことが、上のパッセージにおいて注目すべき第二の点、つまり「修正された」観念論ということに関係することになる。

パースは自分の思想が、その出発点において無意識的に引き継いだエマソンらの思想のゆえに、もともと「良性のタイプの」ウィルスを含んでいたという。そして、この良性のタイプにたいして、「数学的な諸概念と物理的研究の訓練によって」修正が施されたものが、彼の形而上学であるという。彼にとってまさに決定的に重要であり、どうしても強調しておかなければならなかったのは、この数学的諸概念と物理的研究における訓練であり、これによって彼は、自分が新世界アメリカにおけるライブニッツになりうるかもしれない、という自負をもったのである。

チャールズ・パースはアメリカの『人名録 (Who's Who)』にその職業が「論理学者 (logician)」として記載された最初の人物であり、恐らくは唯一の人物である¹⁶。彼はいわゆる今日われわれのいう意味での「論理学」、すなわち数学的な形式として理解されるテクニカルな論理学にかんして、きわめて傑出した業績を残している。その主要な例をあげれば、1881年には自然数の体系の公理化を行い、1885年には量化理論を考案するとともに、真理関数の考えも導入している。さらに、ブールの代数を関係項にも拡張したことは、当時の論理学者のあいだでは彼の最大の功績と考えられており、ドイツの高名な論理学者シュレーダーはこの一事だけでも、パースが論理学の歴史においてアリストテレスやライブニッツに比肩するであろう、と彼に書き送ったくらいである（「あなたの国の人々や世界の同時代の人々がいかにあなたの価値を理解できなくとも、あなたの名声は今後何千年にわたって、ライブニッツやアリストテレスのように輝くであろうということ、そして、誰もがあなたの陣営に加わる他はないことを、わたしは彼[ケイラス]に心から真剣に訴えたのです」¹⁷）。

しかし、パースが自分自身を論理学者と呼ぶとき、その論理は基本的には現代の記号論理学に代表されるような、厳密な形式体系を意味するのではなくて、より広い意味での、科学の妥当な方法にかんする認識論的反省や、さまざまな推論の合理性の根拠の探

求のように、今日では「科学哲学」として分類される研究分野を指していた。パースの最初の代表的な哲学体系は、1877年から78年に『ポピュラー・サイエンス・マンズリー』に発表された、「科学の論理をめぐる諸解明」と題された連続論文であり、彼はこのなかで初めて、有名な「プラグマティックな意味分析の格率」を発表したのであるが、この表題の「科学の論理」という言葉が、まさしく、彼自身が論理学者であると自認したときに意味していたことを表している。

そして、われわれが本書で考察しようとする彼の宇宙論的な研究の時期にはいると、彼はこのような広い意味での論理学を、もう一度整理しなおして、厳密な形式的体系としての論理学の研究を数学の一分野とするとともに、それまで「科学の論理」と呼ばれたものは、一種の百科全書的な科学の分類の作業へと変貌することになる。そして、数学としての論理学が目指すのは、さまざまな推論の形式的体系化であるとともに、そうした体系に現れる基礎的な概念の研究ということになる。パースはこの形式化された体系として、ブール流の代数的演算の体系から出発しながら、徐々に幾何学的な図標（グラフ）をもちいたダイアグラムとしての論理学という考えを重視するようになる。とはいえ、関係項の論理学においても、ダイアグラムとしての論理学においても、彼が目指すのは思考の最根本形式としてのカテゴリーの特定であり、すでに何度か触れているように、彼はこのカテゴリーを「第一性」「第二性」「第三性」という三項からなるものとして特徴づけて、このカテゴリーが単に思考の単位であるばかりではなく、あらゆる種類の存在をも構成する究極的「元素」であるという思想へと進むのである。

さて、パースによるエマソンへの返答が含まれた『謎への推量』は、以上のような思想的遍歴を背景にして、1887年に書き出されたものである。これは彼がハーヴァード大学に在籍していた時代からみると、三〇年程後になるが、この間に彼は論理学の分野で最高の成果を挙げていた。また自然科学の分野でも、天文学における恒星の組成にかんする新理論や、地球の重力にかんする観測、あるいは新しい地図の記法の考案などによって、その名声はヨーロッパにまで鳴り響き、科学者としての資質にかんしても一流であることが、国際的に認められていた。その意味で、この作品は彼の知的絶頂期に書かれたものといってよい作品である。

（もちろん、科学者としての成功とひとりの人間としての成功とは、別の事柄である。彼は論理学者、科学者としての名声を確立する一方で、奇妙なことに、個人的にはこの間に人生における失敗につぐ失敗を経験していた。彼はこの時期にはすでに、アメリカ

の中核的なアカデミズムの世界から、教育者としては失格という烙印をおされており、同時に、経済的にも破産の瀬戸際にまで追い詰められていた。すなわち、若くして将来の大きな学問的成功を約束されながら、人格的な問題—たとえば協調性の徹底した欠如や過剰なダンディズムなど—や、生活のうえでさまざまな事情—たとえば慣習的な結婚制度から逸脱した私生活など—とから、徐々に転落へと向かい、最終的には社会的に廃人同様の生活へと追い込まれていったのである。

本論は一個の人間としてのパースの人生の深淵に光を当てようとするものではないが、しかし、彼が『謎への推量』によって「新時代の到来を告げるような傑作」が生まれることを確信し、その本の扉に、スフィンクスの挿画が飾られるべきであると指示していたそのとき、彼の人生自体ははっきりと暗転していたことは、やはり銘記されておいてもよいだろう。彼の人生の明暗は、彼の宇宙論の内容にはまったく無関係であるが、それでも、その彼が「傑作」と信じた作品制作の背後にある、哲学者としての個人的な決意のありようを、われわれはおぼろげながら推測することができる。この悲惨な状態は残念ながら、『モニスト』論文執筆のころにも変化せず、窮状はむしろ深まるばかりであった¹⁸⁾。

さて、『謎への推量』のテキストは全部で九章からなり、それぞれの章が形而上学、心理学、生理学、生物学、物理学、社会学、神学に当てられて、その冒頭に「一、二、三」という第一章と、「推論における三項性」という第二章が置かれる計画になっていた。つまり、このテキストはその冒頭部で、純然たる形式的論理学によるカテゴリーの導出を扱い、その後で科学の分類とそれぞれにおける三項的なカテゴリーの遍在ということを証明するはずのものであった。いいかえれば、「科学の論理をめぐる諸解明」シリーズから十年後に書かれたこのテキストは、数学としての狭義の論理学と科学の分類学としての科学の論理とを合体したテキストという意味で、パースの本来の論理学のイメージを保持しつつ、さらに各章からなる全体がひとつの立体的な構築物を構成し、知の太陽系、あるいは銀河系のようなシステムとなって、人間的知識の有機的な連結のありさを目のあたりにさせるようにと、構想されていた。（このような構想を「諸理論からなる構築物」と表現したのが、『モニスト』シリーズの第一論文「理論の建築物」である）。

パースはエマソンから引き継いだ「良性のタイプの病気」に、「数学的諸概念と物理的研究の訓練」にもとづく修正を施そうと志したわけであるが、その「長い潜伏期間」の後に立ち現れた具体的な姿は、この数学的諸概念をコアとし、物理的な研究の成果をコ

ロナとするような、知の立体的なシステムに他ならない。それゆえ、その思想的キャリアに即してみると、論理学的研究が新たな思弁的宇宙論へと脱皮、変態し、広大なヴィジョンの羽を羽ばたかせるという意味で、この本は体裁上いかに小さなものであったとしても、たしかに彼の思想の総決算となるべき役割を付与されていたのである。

『謎への推量』には本文に先立って目次と簡単な要約がつけられている。残された実際の原稿は七章の途中までで終わっており、前のほうの部分でも書かれていないところがある。この目次を見ると、パースの考えている哲学体系の構想がよく見えてくるので、ここでは次に、その目次を引用しておくことにしよう。

「第一章 一、二、三。執筆済み。

第二章 推論における三項性。未着手。この章は以下のものから構成されるはずである。

1 記号の三種類。この主題については『アメリカ数学雑誌』に掲載されたわたしの最後の論文が、最良の説明を与えている。[「論理の代数について。表記法の哲学への寄与」(1885)]

2 項、命題、議論。わたしの新しいカテゴリー表にかんする論文で言及されている。[「新しいカテゴリー表について」(1867)]

3 議論の三種類。演繹、帰納、仮説形成。わたしの編著『論理学研究』(1883)に示されている。さらに、三段論法の三つの格について。同じ論文と、議論の分類にかんするわたしの論文に示されている。[「議論の自然な分類法について」(1867)]

4 項の三種類。絶対的項、関係的項、接合的項。わたしの「関係項の論理学」にかんする論文に示されている。[「関係項の論理学における表記法について」(1870)]

これら以外にも、さまざまな三項性について論及できる。これにたいして、二分法を軸に論理学を構成する考えは、事物を絶対的な観点から見るという、誤った方法から帰結するものである。たとえば、肯定と否定以外にも、蓋然的なものがあり、普遍と個別以外にも、さまざまな数量が関与する命題がある。・・・

第三章 形而上学における三項性。この章は認知における三項性を論じているが、全体のなかでも最良の章である。

第四章 心理学における三項性。大部分執筆済み。

第五章 生理学における三項性。大部分執筆済み。

第六章 生物学における三項性。この章はダーウィンの仮説の本当の性格について

論じる章である。

第七章 物理学における三項性。この章は哲学の新時代の萌芽となる（germinal）章である。

1 われわれが科学において期待すべきものについて一定の考えをもつためには、自然法則の自然誌が必要であるということ。

2 説明についての論理的要請からして、いかなる絶対者の想定も許されないということ。つまり、説明はつねに第三性の導入を要求すること。

3 形而上学とは幾何学の模倣であること。そして、数学者が何らかの公理にたいして反対するなら、それに対応する形而上学的公理も失墜すること。

4 絶対的偶然。

5 習慣の原理の普遍性。

6 全体の理論が提示される。

7 その帰結。

第八章 社会学、あるいはわたしのいう魂学（pneumatology）における三項性。意識とは無数の神経細胞の間に生じる公共の意見であるということ。人間は細胞の共同体である。複合的動物、複合的植物、社会。自然。第一性によって含意される感じについて。

第九章 神学における三項性。信仰をもつためには、徹底して唯物論的視点をとることに尻込みしてはならないこと」¹⁹。

先に述べたように、このテキストの第八章、九章は書かれていない。また、全体は第七章で終わっているが、第二章は省かれており（列举されたそれ以前の論文を整理しおなす必要があったためである）、第三章もごく短い断章からなっている。したがって、実質的な議論が展開されている章は、第一章、四章、五章、六章、七章であるが、なかでも第一章と七章が充実している。つまり、冒頭のカテゴリー論と第七章の物理学にかんする形而上学がもっとも実質的な内容をもっているのであるが、このことはある意味では当然の結果である。というのも、純粋に形式的な議論によって、一切の存在者に共通な普遍のカテゴリーを特定するとともに、世界におけるその具体的なはたらきを特定し、宇宙全体の特徴を明らかにすることが、この『謎への解答』の本来のテーマであり、そ

れはまさに、第一章と七章の主題であるからである。

(その他の章では、第五章の生理学の部分が重要である。そこでは生物を作る「原形質」をめぐる考察が展開されているが、その議論は『モニスト』シリーズの第四論文「鏡のように脆い人間の本性」に見られる、生命論へと直結している。この点については、次章で、パースの客観的観念論について論じるところで、改めて見ることにする)。

ところで、その第七章、物理学の部門を見ると、4節から7節にかけて、「絶対的偶然」から「習慣の原理の普遍性」、「全体の理論の提示」、「その帰結」、というテーマが挙げられている。パースの宇宙論とはまさしく、この絶対的偶然と習慣形成の論理を通じて、宇宙の開闢からその終焉までのドラマを透視する理論に他ならない。『モニスト』の連続論文が改めて論じるのはこの部分の議論であり、また、パースが「これがスフィンクスの秘密への解答である」と書いたのも、その帰結の部分においてである。したがって、この物理学の部門の絶対的偶然や習慣の理論こそ、われわれの主要なテーマとなるべき部分であるが、よく見るとその前には、3節として「形而上学とは幾何学の模倣であること」という文章がある。そしてさらに、「幾何学が何らかの公理にたいして反対するなら、それに対応する形而上学的公理も失墜する」とあるが、このことと、第一章の「一、二、三」とは、どう重なってくるのか。第一章の「一、二、三」は彼の形而上学、宇宙論を支える普遍のカテゴリーであるが、このカテゴリー論と、形而上学は幾何学を模倣すべきであるという主張、あるいは形而上学と幾何学とは一蓮托生であるという主張とは、どう関係するのか。というよりも、そもそもカテゴリー論と幾何学との関係はどうなっているのか。パースがエマソンとの差異を数学的諸概念の有無に見たのであれば、彼の宇宙論を理解するために、われわれはこの微妙な問題を考えざるをえないであろう。そして、この問題を考えるなかで、「一、二、三」という、誰の耳にもあまりにも単純に聞こえるカテゴリー論を、やはり理解しておかなければならないであろう。そこで、以下、われわれの次のステップとして、パースの哲学においてどうしても避けて通ることのできない、この形式上の問題へと進むことにしよう。

3 宇宙の元素

パースの哲学はなによりもまず、宇宙の一切のものが「一、二、三」という三つのカ

テゴリーからできているとする哲学である。彼によれば、世界に存在する事物は、物理的なものから精神なもの、無機的なものから有機的なものなど、どの存在の領域をとっても、そこには無数の種類の多様性が見られるにもかかわらず、それらの個々の種類においてすべてこの三つのカテゴリーに対応する存在の様相が現れ出ているという。それはちょうど、物質を構成する一切の化学的元素が、電子の数によって八種類の族からなる周期表にグループ分けされるのと同じである。つまり、「一、二、三」は単なる数字ではなく、さまざまな存在の種において同じ周期を構成する、存在の根本的な要素という意味で、物質的な領域での化学的元素以上に究極的な、宇宙の「元素（ストイケイア、Elements）」なのである²⁰。

「第一のものとは、その存在が端的にそれ自体においてあるものであり、他のものとの参照の下でとか、他のものの外にある、というしかたでは存在しないもののことである。第二のものとは、それがまさにその第二のものとなるような、当のものの力によって、現にあるようにあるもののことである。第三のものとは、それが媒介し、それによって互いに関係に入ることになる二つのもののおかげで、現にあるようにあるもののことである」²¹。

この定義は『謎への推測』冒頭での定義であるが、彼が存在の根本的カテゴリーとして第一性、第二性、第三性ということを考えたのは、哲学研究者としてのそもその出発点からであり、その最初の定式化は1868年、彼が二八歳の若さでアメリカ文芸科学アカデミーのフェローに選出された際に読み上げられた、哲学上の処女作ともいうべき論文「新しいカテゴリー表について」において発表された。そしてこのテーマを練り上げる作業は、彼が死ぬまでの四〇年以上にわたって続けられた。カテゴリー表を作成するというアイデアは本来カント哲学に由来するものであるが、彼は始めから新しいカテゴリー表を作ることを通じて、カントに代わる哲学の新時代の担い手となることを夢みていたのであり、その夢を最後まで抱き続けた。彼はそのために、論理学者としてわれわれの推論のあらゆる局面において、三つのカテゴリーを見つける作業に従事するとともに、それが諸科学のすべての領域で適用可能であるという信念へと向かっていった。『謎への推量』が、こうした科学の論理学者としてのパースの知的絶頂期に書かれたということは、いいかえれば、彼がこの三つのカテゴリーの体系を完成するはつきりとし

た見通しをえたということを意味している。すでに見たように、その第二章はそれまでの論理学研究の成果を整理し直そうとしたものであり、それを出発点にして、諸科学の三項性を順番に通覧していった、宇宙の生成の秘密にまで迫ろうというのが、このテキストのテーマなのである。

この未完の書物の第一章「三分法」には、以上のようなカテゴリー論的体系構想の成立のプロセスが次のように説明されている（『謎への推量』の第一章は、目次では「一、二、三」と題されているが、本文では「三分法（Trichotomy）」となっている。もちろん、内容的に変更があるわけではない）。

「わたしにとってこれら三つの概念の重要性が最初に痛烈に意識されたのは、論理学研究においてであるが、論理学においてこれらがあまりにも素晴らしい役割を果たしたために、わたしは心理学においてもそれを探してみようと思い、そこでも成功を収めると、今度は神経系の生理学においても適用可能なかどうか、問わずにはいられなくなった。そして、神経系での成功から原形質一般にかんする理論へと自然に導かれた結果、原形質の本性についてのみならず、これらの概念そのものについても教訓にみちた理解をもたらすような、ひとつの興味深い思弁の小径へと彷徨い込んだように思われたのである。・・・わたしはこの小径をつたっていった、進化論における自然選択の領域へと容易に辿り着いたばかりではなく、その地点にいたった以上、物理学の領域での思弁にも否応もなく進んでいった。そしてそこでの大胆な飛躍によって、わたしはさまざまな実のなる美しい示唆に溢れる園に迷い込み、さらに先へと進むことを長いあいだ躊躇するほどであった。しかし、程なくしてわたしはさらに探求を進めようと思い立って、これらの三つの観念が、魂、自然、神というもっとも深い問題へと適用できるかどうかを検討した結果、それらが自分を太古の神秘の核心部へと導くにちがいないことを、直ちに見て取ったのである」²²。

「論理学においてこれら三つの概念があまりにも素晴らしい役割を果たしたために、・・・わたしは心理学、生理学、原形質一般の理論をへて、興味深い思弁の小径へと彷徨い込んだように思われた」。そして、「物理学の領域での大胆な飛躍によって、さまざまな実のなる美しい示唆に溢れる園に迷い込んだのち、・・・さらに探求を進めようと思い立って、これら三つの観念が、魂、自然、神というもっとも深い問題へと適用でき

るかどうかを検討した結果、それらが自分を太古の神秘の核心部へと導くにちがいないことを、直ちに見て取ったのである」一。パースはカテゴリー論の追求に並行して、論理学から宇宙論の構築へといたった道筋をこう述べているが、この記述からは、この道筋の最終的到達点として、「太古の神秘の核心部」への洞察が期待されていたことが窺える。

実際には、この洞察に相当するはずの『謎への推量』の最終部「神学における三項性」は、結局書かれるにはいたらなかった。とはいえ、右の文章のある第一章には、すでに、「宇宙の始点、創造主としての神こそが絶対的第一者であり、宇宙の終点、すべてにおいて完全に啓示された神こそが絶対的第二者であり、計測しうる時点すべての瞬間における宇宙の状態が第三のものである」とも述べられており、パースの意識のなかでは、物理的宇宙論の構築と神学的解釈とが重ねあわされたかたちで構想されていたことが知られるであろう。

さて、いずれにしても、このテキストの内容はまさに「一、二、三」というカテゴリーが存在論における絶対的に普遍的かつ根本的な概念ないし観念であることを説明するものである。ところで、この章に続く第二章は、形式的論理学の諸概念がすべてこの三分法に即して理解できることを述べたものであるが、それに先行して、三つの概念の普遍性、根本性を打ち立てる第一章のカテゴリー論は、ある意味では論理学よりもなおも基礎的な方法をとらざるをえない。つまり、カテゴリー論は一切の個別的科学の領域に先行して構成されなければならないばかりか、具体的な論理学の真理よりも先立って確定されなければならないのである。そのような根本的あるいは究極的な洞察は、どうすれば可能になるのだろうか。存在の究極的な元素を特定するというカテゴリー論の企てについて、まっさきに問題になるのはこの方法論の問題である。

パースはこのテキストではカテゴリー導出の方法について明確に述べていないが、その基本的な方法はさしあたってまず、彼の別のところでの言い方をつかえば、一種の現象学 (phenomenology, phaneroscopy) といってよいものである²³。たとえば、最初の二つのカテゴリー、第一性と第二性は、先の定義につづけて次のように記述されている。

「アダムが目を開けた日に彼の目に見えた世界、彼が一切の区別を立てる以前の世界—それが第一のものであり、それは現前し、直接的、新鮮、新奇、始発的、原初的、自発的、自由、鮮明、意識的、つかのまに消えてしまうものである。・・・

第二のものとは、まさしく第一のものなしにはありえないものである。それはわれわれにとって、他者、関係、強制、結果、依存、独立、否定、生起、実在、帰結、というような事実において出会われるのである。・・・

第二のものの観念は、把握が容易なものであることを認めざるをえない。第一のものの観念は、あまりにも柔らかで華奢なものであるから、それに触れようとすればそれを損なわずにはいない。これにたいして、第二のものははっきりとした固さをもち、手で触ることができる。それはまた、非常に馴染みのものでもある。それは日々われわれに降り掛かってくるものであり、人生の教訓の中心をなすものである。若いときには、世界は新鮮で、自分もまた自由であるように思われる。ところが、経験という教育を通じて、われわれは制限、対立、制約、そして第二性一般に馴染んでいくのである」²⁴。

第一性と第二性—それは生まれたばかりの新鮮で繊細な世界と、堅固な事実が支配する現実の世界との差であるが、パースはこの二つのカテゴリーの差異が、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』の、次の一節に例示されているという。以下の台詞は、主人公アントーニオの友人たちが派手な衣装で仮面舞踏会へと向かう場面で、そのうちの一人の若者が語る言葉である。ドラマはまだアントーニオの破産もシャイロックの人肉裁判も出てこない、いかにもヴェニスを舞台にした喜劇らしい、明るい場面設定のもとにある。その場面での次の台詞の、前半が第一性、後半が第二性を例示しているというのである。

「満艦飾で故郷の港を出ていく船を見ろ、
いい気な若者や放蕩息子そっくりじゃないか—

・・・

戻ってくるときも放蕩息子そのものときて、
雨風にやられ船体も帆もボロボロ—」²⁵

ここで第一性が「満艦飾 (scarfed bark)」に譬えられるのは、生まれでたばかりのアダムの目に映る無数の感じや質 (Feeling, Quality) の世界が、まるでマストに飾られたさまざまな色の帆のようだということであり、第二性が「雨風にやられてボロボロ (overweathered and ragged)」だといわれるのは、その後のアダムが生きて働いてい

くなかで出会われる、現実のさまざまな作用・反作用の世界を指してのことであろう。

（そして「放蕩息子」とは、ダンディを気取って破滅へと向かいつつある、パース自身の無意識的な自己認識なのだろうか）。これらはいわば、われわれの意識に直接に現れる存在の様相を、現れるがままの姿で表現してみて、そこにある存在論的な区別を捉えようということである。

しかしながら、これら二つのカテゴリーに続く第三のカテゴリーについては、こうした単純な現象学的方法によって捉えることはできない。この概念は、「最初と最後という二つの絶対者の間の断絶を架橋し、それらを関係へともたらしめるもの」であるが、この存在の様相が第一性と第二性の媒介者であることは、意識に直接にもたらされることではなく、常に反省によって知られる事柄である。

第三性の典型例としては、成長、連続、習慣化などの事象が挙げられる。しかし、たとえば、精神的な事実としての習慣化は、それ自体が直接意識される事柄ではない。また、物理的变化を支配する法則の働きも、それ自体としては感覚に与えられる事実ではない。感覚に与えられる事実としては、あくまでも作用にたいする反作用の事実、つまり第二性の事実があるのみである。したがって、第三性はそれ自身が媒介的なものである以上、無媒介的な意識には与えられず、直接的な意識のもつ限界ないし制約の意識として、より高次の意識の場面で現れるのである。

「すべての科学には質的な段階と量的な段階（Qualitative and Quantitative stages）がある、としばしばいわれる。その質的な段階とは二分法的区別で十分な段階であり、量的な段階とは、そうした粗雑な区別では満足できず、ある主語において、述語によって示される質が所有されることの条件について、ありうる中間段階を挿入する必要が生じるときに、出てくる段階である。古代の機械論では、力ということで、その直接的な帰結としての運動を生み出す原因のことを考えた。・・・この考えでは動力学を進展させることはできない。ガリレイと彼の後継者たちは、力とはある速度の状態が徐々にもたらされる加速の問題であることを示した。・・・加速とは運動によって継起する二つの位置の関係としての速度の問題ではなく、三つの位置の関係であり、したがって、新しい理論の導入は三性の概念の適切な導入によって生じたのである。現代物理学全体はこの観念のうえに打ち立てられている。そして、現代幾何学もまた、古代の幾何学が躓いた無数のケースについて、それらの間隙を埋めるというしかたで、その優位を示すことがで

きるのである」²⁶。

ここでパースは第三性の存在の根拠を質ではなくて量の存在に見だし、とくに量をめぐる物理学や幾何学の変革のなかに見ようとしているが、この点はいろいろな意味で重要な点である。というのも、このような観点にこそ彼の形而上学的宇宙論と数学や物理学との接点が見られるからであり、何よりも、これらから後で見る彼の存在論における、無限小解析を基礎にした連続性の理論—いわゆる「連続主義」—への方向性が伺えるからである。つまり、形式的な論理学に先行する彼のカテゴリー論は、その素朴な私たちでは、意識の直接的な事実を訴えることによって成立する理論であるように見えながら、実際にはこの意識の事実をモデル化するために、幾何学や数学に訴える必要があると考えるのであり、しかもその数学の本質として、微積分法やそれ以上に抽象的な連続性の研究ということを中心におくということを標榜しているのである。

パースのカテゴリー論は高度な抽象によって可能になるというこの点の重要性は、この理論のもうひとつの柱となる主張を考察すれば、さらに明確に理解されるであろう。いうまでもなくこの理論の出発点は、あらゆる存在に汎通的にあてはまるカテゴリーとして、「一、二、三」あるいは「第一性、第二性、第三性」というものがある、ということである。しかし、パースのカテゴリー論の基本テーゼは、これらの三種類の存在論的要素の指定に尽きるものではない。むしろそのより積極的な主張は、存在一般の種類としてはこれで十分であって、これ以上の多項的存在はこの三つのカテゴリーの組み合わせに「還元」できる、というのである（この主張がいわゆる「パースの還元テーゼ (Reduction Thesis)」である）。

パースは単に三種類の存在の「元素」を特定するだけでなく、その十分性を何らかのしかたで証明しなければならない。つまり、存在論上のカテゴリーにはどうしても三つのものが必要であるが、第四、第五のカテゴリーのようなものは不要であることを示さなければならない。しかし、カテゴリーの特定を現象学的な意識の事実を訴えているかぎりでは、そうした証明はどこまでいっても不可能であろう。というのも、証明のためには何らかしかたでのカテゴリーの対象化と、それにたいする推論による操作とが必要なのはであるが、すでに見たように、端的な第一性自体は触れることもできないものであり、それに推論を施すこともできないからである。したがって、カテゴリー間の還元を論じるような、抽象的なモデルとして、どうしても何らかの数学的、幾何学的な道具

立てが必要とされる。その道具立ては、形式的な論理学に先行するという意味で、それ自身でそれらの推論の形式の基礎的枠組みを提供できるようなものでなければならない。しかも、それと同時に、カテゴリーの数的関係を論じるために、何らかのしかたでその値を算術的に計算可能でもあるような道具立てでもなければならない。そのようなモデルが、「現代幾何学のもつ優位性」において与えられることがあるだろうか。このカテゴリー論構想の成否は、もっぱらこうした形式的方法の案出の可否にかかっているといえるであろう。

さて、ここで以上のようなカテゴリー論から出発した『謎への推測』の第七章、われわれにとっての主要な関心事である宇宙論を論じた「物理学の三項性」へと目を転じてみると、この章の冒頭には、次のように書かれている。

「形而上学的な哲学とは、ほとんど幾何学から生まれた子供と呼ぶことができそうなものである。初期ギリシア哲学の三つの学派のうち、イオニア派とピュタゴラス派の二つに属する哲学者はすべて幾何学者であったし、エレア派の人々の幾何学への興味もしばしば伝えられている。……形而上学の可能性は、第一原理からの厳密な演繹という考えに大幅に依存している。そして、形而上学のこの考えと、公理から演繹が行われるプロセスについての考えとは、いずれもその生みの親である幾何学の面影を残している。カントが正しく見抜いたように、何らかの形而上学が可能であるという確信は、どの時代にあっても、同じ形式をもった幾何学という科学の例があるために、保つことができたのである。

したがって、われわれの時代の数学者たちが、幾何学の公理の絶対的な厳密性という考えにかんして、無条件降伏を受諾したという事実は、哲学の歴史にとってもけっして些細な出来事ではない。……幾何学的公理の絶対的な厳密性は崩壊してしまった。それゆえ、幾何学にたいする形而上学の依存ということを考えると、形而上学的な公理にたいする同様の信頼も、幾何学における信仰の後についていって、絶滅した信仰箇条の墓地へと向かう必要があるだろう。この場合、最初に退陣すべき信仰箇条は、宇宙の一切の出来事は不可侵の法則に従ったかたちで、原因によって正確に規定されている、という命題である。われわれはこのことが絶対に厳密だと考えるべき、いかなる理由ももたないのである」²⁷。

宇宙論へのイントロダクションとして書かれたこの文章でパースが論じているのは、形而上学的思弁と幾何学との密接な関係についてであるが、議論の要点は、まさにこの密接な関係ゆえに、数学における大変革が哲学や宇宙論を巻き添えにして、哲学においても大きな変動を引き起こさざるをえない、ということにある。そして、ここでいわれる一九世紀の哲学が直面せざるをえなかった困惑ないし混乱とは、それまでの二千年の歴史を通じて疑われることのなかったユークリッド幾何学の公理の絶対性の崩壊という事態である。彼はこの事態を受けて数学の世界で生じた、複数の非ユークリッド幾何学の可能性の追求と数学的公理の相対化という運動が、形而上学における原理の絶対性への震撼にも繋がっているということを、まず指摘しようとしているのである。

つまり、パースによれば「宇宙の一切の出来事は不可侵の法則に従ったかたちで、原因によって正確に規定されている」という一大原理が、その「正確な規定」という概念の崩壊によって、揺るがされることになった、というわけである。これは、彼の宇宙論の柱となる主張のうち、「連続主義」と並んで重要性をもつ「偶然主義」の主張である。偶然主義とは「必然論」の否定であり、必然論とはすなわち、ラプラスに代表されるようなニュートン力学的世界像の依拠する、「一切の出来事には特定の原因があり、いかなる出来事もその原因によって厳密かつ正確に規定されたかたちで生じている」という思想である。これにたいして偶然主義は、「世界のなかには純然たる偶然が作用する余地がある」、ということを主張する思想である。パースは一九世紀の後半にさまざまな形で噴き出したこの偶然主義の立て役者のひとりとして、必然論が「絶滅した信仰箇条の墓場」へと向かう必要があることを宣告する。彼はこの思想の出現とユークリッド幾何学の絶対性への疑問視とは、哲学史上のひとつの革命の両面として、深く結びついているというのである。

ところで、このユークリッド幾何学の絶対性の崩壊ということは、一方で哲学の危機をもたらしているが、他方では同時に、新しい哲学の可能性の地平をも開いている。というのも、ユークリッド幾何学の絶対性の崩壊は、非ユークリッド幾何学の成立とあいまって、数学の相対性という考えを生むとともに、その多元的数学観のゆえに、さまざまな革新的な探求の可能性の地平を開いたからであり、この探求の可能性は形而上学的哲学の新しい主題にも直結しているからである。それゆえ、幾何学の大変革は哲学にとって否定的な意味のみをもつものではない。そこには数学による哲学の新しいツールの提供の途が開けているのである。

たとえば、幾何学の変革をもたらす哲学への寄与のひとつとして、空間にかんする自然哲学的考察の要請ということがある。ユークリッド幾何学や複数の非ユークリッド幾何学が考えられるとすると、われわれがそのうちに存在し、刻一刻知覚しているところのこの現実空間が、ユークリッド幾何学の適用される空間であることは、アプリアリには主張できなくなる。それでは、われわれのこの現実宇宙の空間は、はたしてどの幾何学に従った空間なのか—幾何学の多元化はそれまで思考不可能であった、このような問題を生み出す効果をもつ。

パースはこの問題を『モニスト』シリーズの第一論文「理論の建築物」で論じており、そこで空間の形式的構造にかんして、次のような三つの可能性を考えたいうえで、それが宇宙論の基本問題であることを確認すると同時に、この問題を経験的、実験的に検証していく必要があることを指摘している。テキストから直ちに見て取れるように、ここでパースは計測をめぐる新しい数学上のパースペクティヴが、宇宙の時間や空間についての複数の可能性を開くとして、その経験的な検証の重要性を指摘しているが、この主題は、宇宙の膨張のプロセスのさまざまな可能性の検証というような形で、現代においても、異なったしかたではあるが熱心に追求されつづけている問題である。われわれはこのテキストを読むと、一九世紀後半の科学理論として見た場合の、彼の宇宙論的探求の視座の新しさを確認できるとともに、その問題意識の現代との連続性についても強く印象づけられずにはいられないであろう。彼は以下の問題が「これから百年の間に、われわれの孫の世代に」解決を見るであろうとしているが、それはまさに今日のわれわれの時代のことであるからである。

「計測 (measurement) にかんする現代の考えは哲学的な側面をもっている。一本の線に沿って計測する方法は無限にある。・・・しかし、何らかの特定の定規の連続的移動によってその線に沿った計測が行われるときには、それがいかなる定規であれ、その定規の目盛りのどの数によっても到達できない点が二つあることになる。このような計測によっては到達できない二点は、絶対的なもの (the Absolutes) と呼ばれる。これらの二点は独立した実在点であるかもしれない、一つに合致している点かもしれない、仮想的な虚点であるかもしれない。二つの絶対値をもった一次量の例としては、確率が挙げられる。・・・他方、角度は、測定不可能な値が実数とならない例である。哲学が考察しなければならない問題のひとつは、宇宙の展開がこの角度の増加に似ており、到達できない

何ものかに向かって永遠に進行していくものなのか—わたしはこれがエピクロスの考えであると思う—、それとも、宇宙は無限の過去にカオスから躍り出て、無限の未来における原初のカオスとは異なったものへと向かっているのか、それとも、宇宙は過去において無から生まれ無限の未来へと無限に進んでいるものなのか、という問題である。三番目の場合には、宇宙が向かうその無限の未来は、それが出発したのと同じ無ということになる。

絶対的なものについてのこの思想を、空間のほうに適用すると、空間は次のいずれかであるということになる。

第一に、空間はユークリッドが教えているように、限界をもたず (**unlimited**) かつ無限大 (**immeasurable**) である。この場合には、平面に属する無限遠方の部分を透視図的に見ると直線に見え、三角形の内角の和は一八〇度となる。

第二に、空間は無限大であるが、限界をもっている。この場合には、平面に属する無限遠方の部分を透視図的に見ると円に見え、三角形の内角の和は、その面積に比例したしかたで一八〇度以下となる。

第三に、空間は限界をもたないが、有限の大きさ (**finite**) であり (ちょうど球面のように)、したがって無限遠方の部分をもたず、直線に沿ったいかなる有限の移動も元の場所に帰ってくるので、遮るものがないところで遠方を見れば、自分自身の背面を極端に拡大して見ることになる。この場合には、三角形の内角の和は、その面積に比例したしかたで一八〇度以上となる。

これらの三つの仮説のうち、正しいのはどれなのか、われわれはまだ知らない。われわれが現在測定可能な最大の三角形は、地球の軌道の直径を底辺にして、恒星までの距離を高さにした三角形であり、その内角の和と一八〇度との差を視差と呼んでいるが、今まで観測された視差は四〇個ほどの恒星についてのみである。・・・わたしが考えるには、もっとも遠方の星の視差も、 $-0.05''$ と $+0.15''$ の間であろうと確信してよいと思われる。また、これからの百年の間には、われわれの孫の世代が、この空間の三角形の内角の和は一八〇度以上なのか以下なのかを知ることは、確実であろう」²⁸。

さて、非ユークリッド幾何学の登場によって可能になった、現実空間がいかなる幾何学に従っているのかという問題は、科学的な探求としてあらゆる知識の動員を必要とするような、きわめて刺激的な問題である。しかし、非ユークリッド幾何学の出現は同時

に、こうした経験的問題とは別の問題関心をも呼び起こした。それは、複数の幾何学を共通の観点から分析できる、より抽象的で、より高度な意味で一般的であるような、新しい幾何学の方法の可能性ということである。この時代にそうしたより抽象的な観点から遂行される幾何学として脚光を浴びたのは、いわゆる「射影幾何学」や「トポロジー（位相幾何学）」であるが、この考えの一端は、右の引用のなかでも三種類の空間の区別の方法として言及されている。

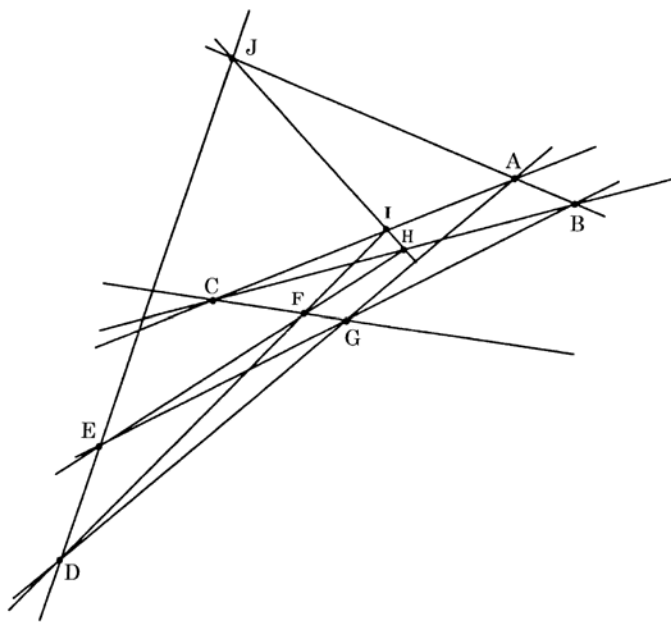
パースはこれらの新しい幾何学を父の業績によって学び、さらには彼自身がひとりの数学者として、その推進に一役買うことになった²⁹。そして彼は、この方向を追求することでカテゴリー論や形式的演繹推論に利用できるような、ある種のグラフ理論が構築しうることを見抜くこともできた。彼がそのカテゴリー論、とくに「還元可能性のテーゼ」の証明において最終的に依拠しようとするのは、特殊なタイプのグラフ理論であり、彼はこの証明によって、数学的形式性を備えた形而上学的体系というヴィジョンが、単なる理念やアイデアに終わらない、説得力をもった主張へと脱皮することができると考えた。この理論によってその還元可能性テーゼが証明できるゆえに、彼にとっては、まさしく、「形而上学的哲学は幾何学から生まれた子供であると呼ばれてもよい」、と考えられたのである。

したがって、幾何学の複数化、相対化を通じて、たしかに形而上学的思弁の体系的確実性は崩壊せざるをえなくなった。しかしそのことは必ずしも形而上学の不可能性を意味するわけではなかった。むしろ絶対的な確実性を主張しなくても、幾何学的な洞察に導かれた新しい思弁のスタイルを考えることができる。それは幾何学の抽象化の方向に沿って、世界の存在一般の「元素」を新たに特定し直してみる試みである一。パースの宇宙論を導くはずの形式的な思考の役割は、結局のところ、およそこのような想定のもとで追求されることになったのであり、そのために、抽象的な数学のさらなる抽象化ということが、論理学の形式的基礎づけという動機とあいまって、徹底して求められることになったのである。

それでは、射影幾何学や位相幾何学はいかにしてカテゴリー論を導き、支えることができるのか。ここではこの思想の奥行きに見合うような形式上の詳細を展開することはできないが、少なくともその骨格だけは何としても理解しておく必要があるであろう。以下、あくまでも彼の哲学の理解に必要な最小限度の情報として、このテーマの輪郭だけを記しておく。説明は簡単かつ無味乾燥なものになるが、それは事柄がしからしめる

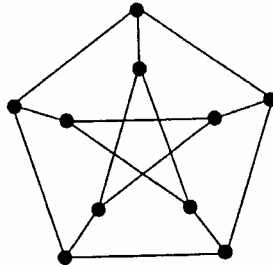
こととして、理解してもらえらるであらう。

まず、次のような図を見てみよう。図は複雑な十本の線からできているが、これは射影幾何学では「デザルグの定理」あるいは「十本線の定理」と知られている、ひとつの定理を示す図である(デザルグはデカルトと同時代のフランスの建築家、数学者であり、射影幾何学の祖と呼ばれる)。この図のなかのどれか二つの三角形(六本線)を取り出したとき、それら二組の三つの頂点どうしを結んだ線(三本線)が、一つの点で交わるとする。このとき、各頂点に向かいあった辺を延長した線どうしの交点を作ると三つの点ができるが、これら三点は一直線上に並ぶことになる(十番目の線)。(たとえば、 ABC と DEF を取り出すと、 A と D 、 B と E 、 C と F を結んだ線は、 G という一点で交わる。このとき、 A に向かいあった辺 BC と D に向かいあった辺 EF の延長線どうしの交点として H ができ、同様にして他の二組の頂点についても交点 I と J ができるが、 H 、 I 、 J は一直線上に並ぶことになる。)こうした特性をもつ二つの三角形の組み合わせは、この図において九通り成立している。この図のなかの直線を光線のようなものと考え、一直線に並ぶ点は、それぞれの光線の組み合わせが直線上に射影されたものであると考えることができる。つまり、光線の交わりについての透視図的な関係が示されるのである³⁰。



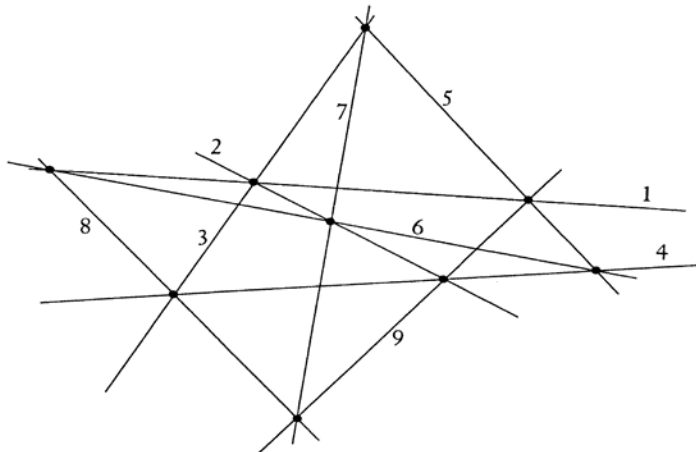
ここで、この定理を今度は光線のほうを点で表して、それらが作る交点のほうを線で表すと、次のような抽象的な関係が表示できる。これはデザルグの定理を抽象的な幾何

学の観点から分析し直したものであり、一九世紀イギリスの弁護士、数学者アルフレッド・ケンペが考案した図である。

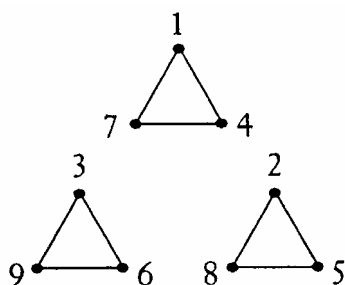


ケンペはこの図（グラフ）をもとにして、射影幾何学空間を構成するのは、このグラフを作る点と線のふたつであることを主張した。これはつまり、ふつうの空間を射影関係によって抽象してできる空間を構成するのは、二つのカテゴリーであるということである。パースはこの考えの革新性を非常に高く評価したが、その結論には反対した。彼にとっては射影空間を抽象的に表記するには、三つの要素が必要であり、したがって、世界は三つのカテゴリーからなるのである。

たとえば、次の九線からなる図を考えると、先の十線と同じような結果が得られる。



ところが、ここでの三線の交点を表記するためには、どうしても次のような三角形が必要であり、ケンペのように二種類の記号からなるグラフでは表記できないのである。



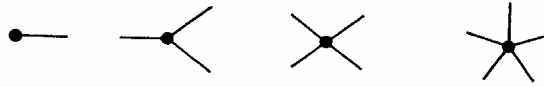
パースのカテゴリー論の幾何学的な基礎づけというのは、以上のような「グラフを用いた結合の形式の分析」という着想を応用したものである。実際には上の十線や九線の図形の問題だけでは、カテゴリーは二つでは不十分であり三つが必要である、ということを示しているにすぎない。重要なのは、何度か指摘したように、いかにしてカテゴリーの相互独立と還元可能性の両方を証明するのか、という問題である。ここではこの問題について、最後に、この理論のもっとも基礎的な骨格をなす「価数分析 (Valency Analysis)」というアイデアを使って、本当にさわりとなる部分だけを説明しておくことにする³¹。

まず最初に、「稲妻が走る」、「雨が庭石を打つ」、「光が草に栄養を与える」というような命題を考える。最初の命題は、「・・・は走る」という単項関係を表す文、つまり第一性を示す文である。第二のものは、「・・・が・・・を打つ」という二項関係を表す文、つまり第二性を示す文である。第三のものは、「・・・が・・・に・・・を与える」という三項関係を表す文、つまり第三性を示す文である。これらの「・・・」を使った文は、元の文から見れば、関係しあう項、関係項を抽象化して、一般化した文である。

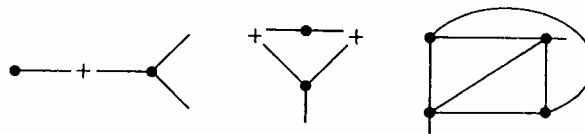
ここでたとえば第二の文を例にとって、この二項関係をさらに一般化する図を作ること考える。そのために、関係そのもの（「打つ」という関係）を黒点で表し、この関係のもとにある関係項（「雨」「庭石」などに相当するもの）を線で表す。そうすると二項関係を表す次のような図（グラフ）ができる。



同様にして、単項、三項、四項、五項からなる関係は次のようなグラフで表記される。このとき、それぞれのグラフで中心の関係から出ている線の数、そのグラフの「価数」であるといわれる。



ところで、このグラフでは黒点が関係を表し、そこから出る線は腕のようなものであるが、腕の先には「空いた手」「ルースエンド」があるので、ルースエンドどうしは結びつくことができる（正確には、価数とは、この空いた手をもつ腕の数のことであり、他の関係とも結びついた線は価数に数えられない）。この結びつきは二つのルースエンドどうしのみで生じ、それ以外のしかたでは生じることができない。たとえば、次のような例が、グラフどうしの結びつきの例である（左側の二つの図では、結びつきの箇所が明らかになるように、+記号を加えてある。右側のものはこれを省いて、一つのグラフにしてある）。



グラフどうしの結合にかんするこの規則に従えば、単項から五項関係までを表した先の四つのグラフには、もともと合計して13のルースエンドがあるが、それらの先端どうしが結びつけば、全体としてひとつのグラフが出来上がり、そのルースエンドは13ではなく3になる。この結合の規則によれば、一般に、いくつかのグラフを結合してできる全体のグラフの価数は、結合をもたない当初のグラフの価数を総計して、そこから結合の数の二倍を引いた数になるはずである。

ところで、グラフをいくつか結合してできる複合グラフの価数が、この計算によってえられるのだとすると、奇数の価数をもつ複合グラフは偶数の価数のグラフからは形成できないことが導かれる。というのも、結合前のグラフの価数の総計が偶数で、そこから偶数を引いた数が奇数になるということは、不可能であるからである。したがって、価数3のグラフを価数2のグラフだけから作ることはできないことになる。

さらに、この結合の規則に従えば、価数1のグラフをさらに基本的な要素グラフに分解することはできない、ということも帰結する。というのも、価数1と価数1のグラフは価数ゼロのグラフを生むが、価数ゼロのグラフは結合するルースエンドをもたないので、何かを生み出すことはないからである。価数2のグラフと価数1のグラフは価数1

のグラフを作る。価数2のグラフと価数2のグラフが結合すれば、価数2のグラフができる。価数3のグラフ二つが二ヶ所の結合をもてば価数2のグラフを作る。価数3のグラフ三つが三ヶ所の結合をもてば価数3のグラフを作る。そして、価数3のグラフ二つが一ヶ所の結合だけをもてば価数4のグラフができる。4以上の価数Nは、同じやりかたで、N-2個の価数3のグラフで作られる。

このような価数分析の考えを算術で書くと、次のような不思議な算術が成立する。

$$1 + 1 = 0$$

$$1 + 2 = 1$$

$$2 + 2 = 2$$

$$3 + 1 = 2$$

$$3 + 2 = 3$$

$$3 + 3 = 4$$

$$3 + 3 + 3 = 5$$

Nが4以上のとき、この算術の一般的な式は次のように与えられる。

$$(N-2) \times 3 = N$$

この価数分析が、パースのカテゴリー論の主張、すなわち三つのカテゴリーが必要であり、かつ十分であるという主張を、見事に証明していることが理解できるであろうか。グラフの価数とは関係のもつ関係項の数である。世界のうちなる関係には、単項、二項、三項関係が、それぞれ独立の関係として存在する必要がある。しかし、三項以上の関係は三項関係の結合によって自由に作り出すことができる。したがって、世界はまさしく三種類の関係からできていると考えられるのである。(正確に言えば、単項関係は「関係」ではなく、それゆえにカテゴリーは「概念」ないし「観念」であり、それは「第一性」「第二性」のような抽象的な名称で呼ばれることになるのである)。

宇宙の元素としてのカテゴリーを支配する算術的規則—これこそが「宇宙のなかで働く数学 (The Mathematics in the Cosmos)」に他ならない³²。そして、存在者一般は数からできており、その間の関係を規定しているのは宇宙の数学である—これは一般に古くから古代のピュタゴラスに帰属させられてきた考えである。

パースは—『謎への推測』や『モニスト』シリーズよりさらに後のことになるが—1900年以降、以上のような自分の考えを、しばしば「新ピュタゴラス主義 (Cenopythagoreanism)」と呼ぶようになる。新ピュタゴラス主義とは、「普遍的カテ

ゴリーは数と結びついており、数によって呼ばれるべきだということを容認する点で、ピュタゴラス主義に類似する思想の立場である」、とされる（パースによって書かれた『センチュリー百科事典』での定義）。カドワースやエマソンはプラトン主義を標榜しながらも、その実態は一種の「新プラトン主義」に属するものであった。パースにとっては彼らとの違いを強調するためにも、最終的に「新ピュタゴラス主義」という新奇な言葉を作る必要があったのである³³。

¹ *The Century Dictionary and Cyclopedia*, vol. 10, p. 217, The Times Book Club, 1909. この項の説明はパースが書いたもの。パースはこの事典のために五千語以上の言葉の定義を執筆した。

² 『連続性の哲学』二六四頁。

³ フリードリッヒ・シェリング『ブルーノ』、服部英次郎、井上庄七訳、岩波文庫、一九五五年。

⁴ エルンスト・カッシーラー『英国のプラトン・ルネッサンス—ケンブリッジ学派の思想潮流』、花田圭介監修、三井礼子訳、工作社、一九九三年。この他に、わが国の研究者たちによる、この学派の代表的思想家の解説と翻訳集として、新井明、鎌井敏和編『信仰と理性—ケンブリッジ・プラトン学派の研究序説』、御茶の水書房、一九八八年、がある。

⁵ カッシーラー、前掲書、三〇頁。

⁶ Ralph Cudworth, *The True Intellectual System of the Universe*, 3 vols., Reprint of the 1845 edition, Thoemmes Press, 1995. カドワースの研究書としては、John Passmore, *Ralph Cudworth; An Interpretation*, Cambridge University Press, 1951 が信頼がおける。その他に、Stephen Gaukroger, *The Uses of Antiquity; The Scientific Revolution and the Classical Tradition*, Kluwer Academic Publishers, 1991. に所収のカドワースにかんする論文二篇も参考になる。また、註（4）に挙げた『信仰と理性』に収められている、カドワースの「解説」と『下院での説教』のテキストも重要である。とくに、後者のテキストの、次のような書き出しの文章を見ると、カドワースとエマソンとの思想的通底の実相が如実に感じられる。「この終末の時代、知識に関して多くの探究がなされている。アダムの子孫たちは、かつてのアダム自身と同じほどに善悪を知る「知識の木」に心を奪われ、その大枝をゆさぶり、その実を奪い合っている。しかるに多くの者が「生命の木」を気にかけていなさすぎるように私には思われる。炎の剣で人びとを脅かして生命の木から遠ざけようとするケルビムは、今はいないのに、人はそこに到る道を通わず、あたかもその実を味わおうとする者はほとんどいないかのようである」（一二二頁）。

⁷ リチャード・ジェルダード『エマソン 魂の探求』、沢西康史訳、日本教文社、七四頁。エマソンにたいするカドワースの影響については、次のものが詳しい。John Harrison, *The Teachers of Emerson*, Haskell House, 1966.

⁸ Cf., W1 p.103, E2 p.73.

⁹ Cudworth, *op. cit.*, vol. 3, p.434f.

¹⁰ Cudworth, *op. cit.*, vol. 1, p.219ff.

¹¹ マシャム夫人の生涯と思想の概略については、次のものを参照されたい。Mary Ellen Waithe ed., *A History of Women Philosophers*, vol.3, *Modern Women Philosophers, 1600-1900*, Kluwer Academic Publishers, 1991, Ch. 5. マシャム夫人とライプニッツの交流については、Paul Lodge, ed., *Leibniz and His Correspondents*, Cambridge University Press, 2004, Ch. 9 が参考になる。また、マシャム夫人の宗教と道徳にかんする著作（1696年と1705年）が、最近復刻された。Damaris Cudworth Masham, *A Discourse concerning the Love of God; Occasional Thoughts in reference to a Virtuous or Christian Life*, Thoemmes Continuum, 2004.

12 カッシーラー、前掲書、一四八頁以下。

13 E1, p.312f.

14 エマソンとジェイムズ・シニアやパースの父との交流については、Ralph Barton Perry, *The Thought and Character of William James*, New Edition, Vanderbilt University Press, 1996, Ch. 2 “The Elder James and Emerson” が詳しい。

15 ケイラスの思想全般については、James Sheridan, *Paul Carus; A Study of the Thought and Work of the Editor of the Open Court Publishing Company*, University of Michigan Press, 1957 が詳しい。また、ケイラスと鈴木との協力関係は、次の翻訳から伺われる。ポール・ケイラス『仏陀の福音』、鈴木大拙訳、森江書房、一九〇一年（原著は、*The Gospel of Buddha, according to Old Records*, Open Court, 1894. 邦訳は『鈴木大拙全集』第二五巻、岩波書店、一九七〇年にも収められている）。

16 Cf., E1, p.xxix.

17 ジョゼフ・ブレント『パースの生涯』、有馬道子訳、新書館、二〇〇四年、四四〇頁から引用。

18 パースの詳しい伝記としては、何といっても、前註に挙げたブレントの伝記が決定版である。ブレントはパースの哲学思想に通暁しているばかりでなく、人間パースにたいする深い理解と共感によって、その困難な生涯のさまざまな側面に光をあてている。この伝記の出版そのものが、いくつかの事情によって非常に長い年月を要したことも（シービオクによる「はしがき」参照）、この著書を陰影の深いものになっている。これ以外のパースの伝記としては、Kenneth Ketner, *His Glassy Essence; An Autobiography of Charles Sanders Peirce*, Vanderbilt University Press, 1998 が豊富な資料を収めている。本論末尾の註に示したように、ケトナーもまた、パースのカテゴリー論の解明に努力を傾注した研究者であり、その伝記はパースへの敬意と共感に溢れている。

19 W6 p.166f.

20 「元素」Elementsという言葉は、もともと古代ギリシアのタレスやアナクシマン드로スの「万物のアルケー（始元、原理）」や「ストイケイア（元素）」に通じる、重要な言葉であるが、パースにとってはそれ以上に奥行きのある意味をもっている。というのも、通常『原論』と訳されるユークリッドの『ストイケイア』は、英語ではElements であるが、この場合のこの言葉は、アルファベットのような「字母」という意味をもつ。本論の後半で示すように、彼のカテゴリー論はユークリッド幾何学の絶対性が失われたのちに、新たなストイケイア、New Elements として考案されるものであり（註（28）を参照）、万物の元素であると同時に思惟の基本的単位という両面をもつ「カテゴリー」を、数学を導きの糸にして見つけようというのが、彼の『原論』の構想なのである。また、カテゴリーと化学的元素との類比は、たとえばE2 p.362ff など、随所で語られるが、電子価のような化学的性質とカテゴリーの値の類比も、以下の「価数分析」のアイデアから、自然なものとして理解できるであろう。

21 W6, p.170.

22 W6, p.176.

23 パースが「現象学」という考えを正面から論じたテキストとしては、次の二つが代表的なものといえよう。1903年、プラグマティズムにかんするハーヴァード連続講演、第二講「現象学（phenomenology）について」（E2, Ch.11）、1905年、プラグマティズムにかんする『モニスト』連続論文、第三論文「現象学（phaneroscopy）におけるプラグマティズムの基礎」（E2, Ch. 26）。

24 W6, p.170f.

25 ウィリアム・シェイクスピア『ヴェニスの商人』、松岡和子訳、ちくま文庫、二〇〇二年、七〇頁。

26 W6, p.172.

27 W6, p.203f.

28 E1, p.294f.

29 数学者としてのパースの業績は、アイスリーの努力によって、全四巻五冊の大部な論文集にまとめられている。Charles Sanders Peirce, *The New Elements of Mathematics*, 4 vols., Carolyn Eisele, Mouton, 1976. 位相幾何学にかんする代表的作品は、この論文集の第二巻に収められた、全四部、二〇〇頁以上からなる“New Elements of Geometry Based on Benjamin Peirce’s Works and Teachings”（1894）である。題名が示すように、この作品は父ベンジャミンの著作Elementary Treatise on Plane and Solid Geometry（1837）

の拡大改訂版である。

30 以下の説明は1903年、プラグマティズムにかんするハーヴァード連続講演、第三講「カテゴリー論の擁護」における議論を要約したものである（E2, p.174f）。しかし、基本的に同じ考え方は、「理論の建築物」（E1 p.293）でも『連続性の哲学』二三〇頁でも述べられている。

31 パースはその還元テーゼを非常に多くの場所で主張しているが、それを厳密に証明した論文は公にはほとんど発表しなかった。そのために、これまでのパース研究では、この証明をいかに構成するかが、大きな問題となってきた。この問題に、パースの膨大な遺稿研究から光をあてることに成功したのが ケトナーである。以下の簡単な説明は、次のケトナーの論文を参照してまとめなおしたものである。同じケトナーの二番目の論文は、この理解の根拠となる1906年前後の重要な未公開論文について解説し、パースが考えた「価数分析」や「新ピュタゴラス主義」の定義を紹介するとともに、この考えと「存在グラフ」などの図標的論理体系との関係を明らかにしたものであり、パースの論理思想の解釈としてはもっとも決定的な意味をもつもののひとつである。三番目のバーチの著作は、基本的に同じ考え方を、「トポロジカル・ロジック」という形式体系の構成にしたがって、完全に形式化したものであり、続くシンの著作も、パースのグラフによる論理の体系化を概観した、最近の研究である。Kenneth Ketner, “Charles Sanders Peirce: An Introduction”, in *Classical American Philosophy: Essential Readings and Interpretive Essays*, John Stuhler ed., Oxford University Press, 1987. Ketner, “Peirce’s ‘Most Lucid and Interesting Paper’: An Introduction to Cenopythagoreanism”, *International Philosophical Quarterly*, 26, 1986. Robert Burch, *A Peircean Reduction Thesis: The Foundations of Topological Logic*, Texas Tech University Press, 1991. S. J. Shin, *The Iconic Logic of Peirce’s Graphs*, M.I.T. Press, 2002.

32 「宇宙のなかで働く数学」という表現は、註（18）で挙げたケトナーの*His Glassy Essence* p. 341での表現を借りたもの。カテゴリー論をこのように解釈する理解は、このテキストでは架空の登場人物の口を借りて表現されているが、その人物の正体は小説家、詩人のウォーカー・パーシーである。パーシーは、『廃虚の愛』『タナトス・シンドローム』などの作品で現代の狂気を追求した小説家であったが、一方で、生涯パースのプラトン主義的な実在論に傾斜した記号論に興味をもっていた。次の書物は、このパーシーとケトナーとの往復書簡を編纂したもの。この本には補遺として、カテゴリー論にかんするケトナーの論文数篇が付されており、その中には前註に挙げた二論文も含まれている。Patrick Samway ed., *A Thief of Peirce: The Letters of Kenneth Laine Ketner and Walker Percy*, University Press of Mississippi, 1995. また、パースの思想を、世界は数でできているという考えよりも、世界はグラフでできているという考えと解釈して、その延長上に「グラフ論的存在論」を考案した、次のような別の研究もある。この論文では、パースの存在論と現代のスーパーstring・モデルなどを基礎にした「万物理論（The Theories of Everything）」との類似性が指摘されている。Randall Dipert, “The Mathematical Structure of the World: The World as Graph”, *The Journal of Philosophy*, 94-7, 1997.

33 「新ピュタゴラス主義」という言葉は、現代の古典研究では、後一、二世紀頃のゲサラのニコマコスやアパメアのヌメニオスなど、ヘレニズム時代に一旦消滅した学派がもう一度再生した後の思想家たちの理論を指すが（B・チェントローネ『ピュタゴラス派』、斎藤憲訳、岩波書店、二〇〇〇年、参照）、パースの時代にはこの言葉はなかったようである。また、パースのこの言葉の接頭詞“ceno”はギリシア語の“Kainos”をラテン語化したもので、「近年の」を意味するのであるから、この言葉は正確には「新ピュタゴラス主義」というよりも、「軌近ピュタゴラス主義」とでも訳すべきものであろう。

＊本研究の一部は、京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」による成果である。

（京都大学文学研究科教授）